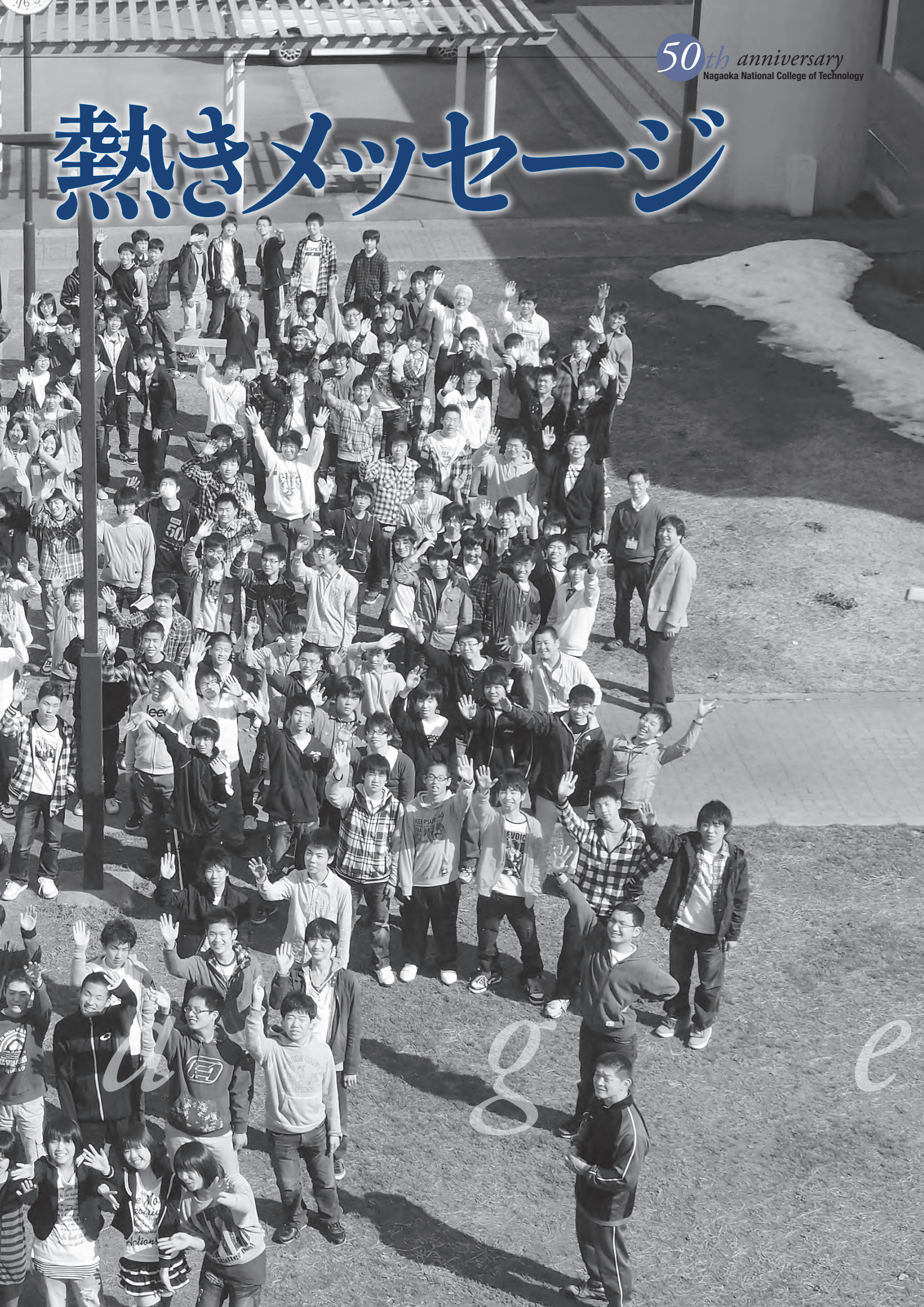
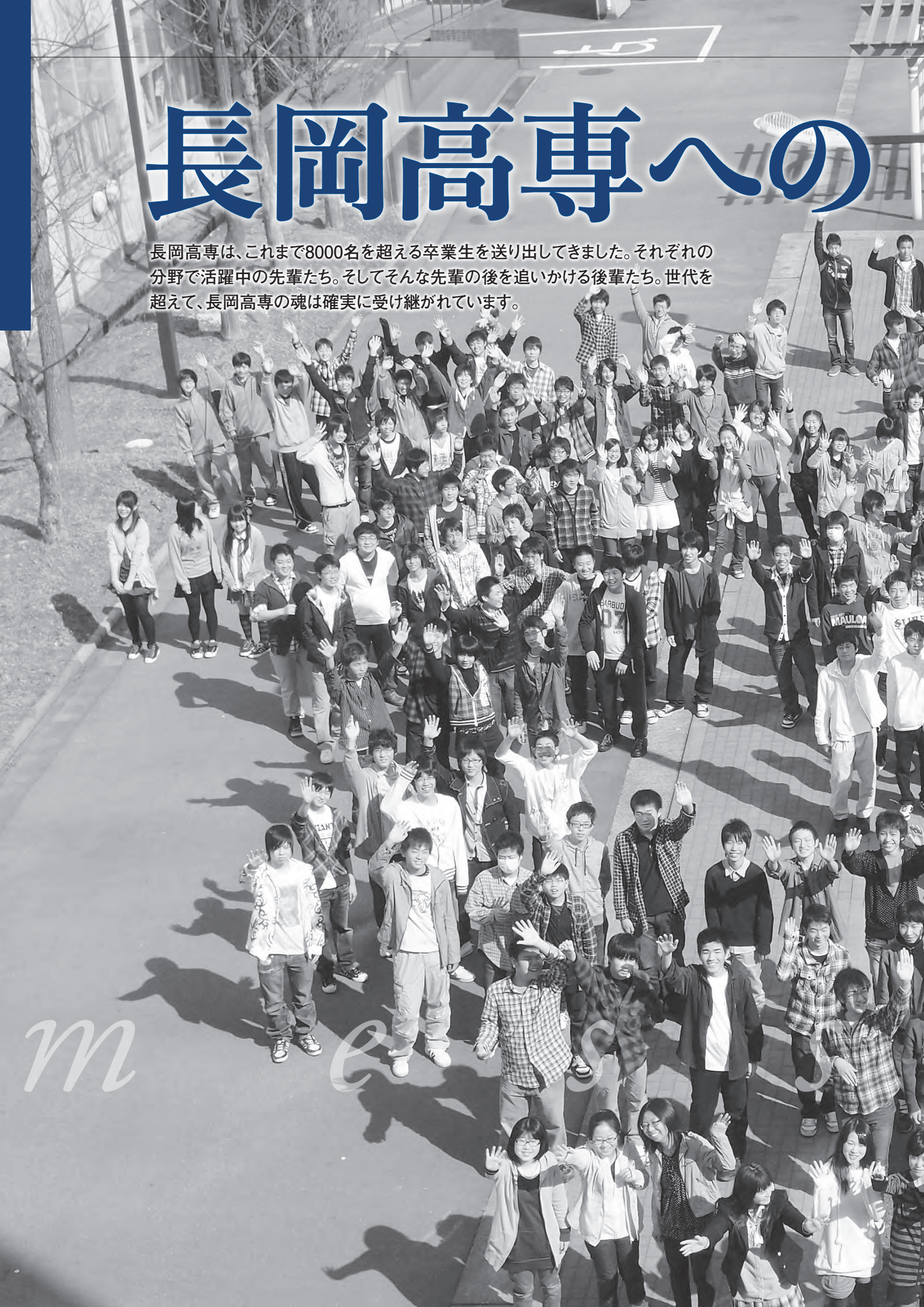
熱きメッセージ



長岡高専への

長岡高専は、これまで8000名を超える卒業生を送り出してきました。それぞれの分野で活躍中の先輩たち。そしてそんな先輩の後を追いかける後輩たち。世代を超えて、長岡高専の魂は確実に受け継がれています。



message

School personnel — 1

変化はロマンを呼ぶ——十年後の高専、老人の夢

旧教職員　室橋　奨さん

昭和三十七年工業短大工業化学科に奉職し平成二年に退職、その後ODA関係の仕事でしたがマレーシアでの高専留学生のための予備教育センターの設立とその後の管理運営に六年間従事し、それを含めもう二十年が経過してしまいました。

高専も創設の頃より制度的に随分変化しました。当初中堅技術者の育成と謳われていた袋小路制度も、高度成長期に入り国民所得が増大するとともに、大学志望が圧倒的に多くなった情勢に応じ、十五年目あたりから行き止まりの解消が計られました。わずか二校ではあるけれど、高専からの進学を意識した技術科学大学が創設され、高専内に専攻科も出来て、学士号も取れるようになりました。大学工学部も高専卒に編入学の枠を設けました。

ところが、最近は大企業に学歴不問を唱えるところも出てきました。しかし、これは学生に学力は当然のことながら個性があって欲しいと言うことです。高専は大学へのside-courseとはなったけれど、皮肉にも逆に特色が見えなくなってしまいました。事実、学生全員が大学へは進みません。そこで何か強烈なイメージが欲しいと言うわけです。

ここからは老人の夢です。

まず、日本人の英語でのcomunication力の乏しさに焦点を当てましょう。最近、日本の有名大企業や貿易会社は社内公用語を英語にするところも出てきました。そこで夢です。十年後、長岡高専は長岡国際高専（NAGAOKA International College of Technology）になっています。学生の三分の一は外国人留学生です。その頃の学生は、多分小学校からのnative speakerの英語教育でhearingに慣れていますから、交流により英語会話に磨きがかかります。講義という授業形態も今より大きく変わります。電子書籍、電子教科書の時代です。学生は音声、映像、3D及びペン書き込み可能なPCを与えられ、当初三年次までは音声映像付英文和文対応教科書をdown-lordし、繰り返し先ず自学自習をします。実験実習のdirectionも同じです。三年次以下の基礎専門は、公募契約外国人教師が勤め、従来の授業は、質問し質問される時間と変身します。高学年では勿論英語主体で、大型スクリーンで映像を多く使った講義を受けます。五年間でhearingやspeaking力で、専門分野での技術会話ぐらいは、英語で余り抵抗感なく出来るようになるでしょうし、外国大学への留学も特別なものではなくなるでしょう。という夢です。

もうひとつは、高専入学者は若くて性格は様々、より狭くより深くと目指す人もいれば、浅くともよいがより広い技術分野に興味がある人もいるでしょう。社会のneedsもそれなりにあるはずです。そのために、長岡国際高専には総合工学コースというものが設けられます。五年間で三学科ぐらいの横に広い工学基礎の素養と英語力を持ち、境界領域に強く幅の広いengineerとして今後ますます必要とされる国際社会での活躍や、あるいは自ら起業家・経営者としての活躍が期待されます。という夢。

学校も企業同様、十年先を見据えて変化していかないと生きていけない時代かもしれません。学生も同じでしょう。以上、老人の自らの反省を込めての夢を述べさせていただきました。

最後に教職員、学生の皆さん健康でcomfort zoneを超えるように（ノーベル化学賞根岸先生の詞）頑張ってください。言うは易く為すは難しいですが、ロマンを持ちましょう。世界は広くして狭し、地球は大にして小、人生は短し。八十老青年記。

School personnel — 2

体験・実践

―高志台から生まれる新時代のリーダー

私は、長岡高専が設立された年より三十六年間、高志台学園の一員として勤務させていただきました。技術教育の難しさに戸惑うこともありましたが、若い学生との付き合いは魅力的で、私は学生と一緒に勉強させてもらうような気持ちで頑張りました。就職した頃は日本経済が高度成長期にあり、その原動力であった科学技術には親しみの目が向けられていました。当然のことながら学園には活気がみなぎっており、私はこの仕事に従事できる幸せを強く感じました。早速そのころ町に出回り始めていた自動車の中古を買って、エンストも何のその先駆け気分を味わったりもしたものです。楽しさは抜群でした。このような時代に長岡工業短大・高専はスタートを切ったのです。その後の科学技術の急速な発展は皆さんが実感しておられる通りです。

当学園の卒業生はあらゆる分野で大活躍をしました。ある時、求人に来られた企業の社長さんから、貴校の卒業生はよく体が動いていいという言葉をいただきました。実践的で積極的に問題に接近していく力があり、それはどのような問題に遭遇するか分からない生産の現場においては重要な資質であるということでした。私は大変嬉しく思い、また高専制度が「体験・実践」を重んずる高等教育機関としてスタートした意義を再確認しました。

合宿研修での磐梯山登山では、私は学生の身体機能の高さに驚きました。三十歳代だった私は、学生の姿を見失わないのがやっとで、若者の持つ潜在力を思い知らされました。また卒業研究などで、学生が目の前にある装置に夢中になり、ついにはこれを使いこなしてしまうのに驚きました。ロボコン製作では学生の出すアイデアの奇抜さにただただ唸るばかりでした。

総合的にみて高専の学生が身の回りにある物や装置を使いこなす高い能力を備えていると私は気付き、これをずっと伸ばしてやるのが本人の為によいのではないかと強く思うようになりました。ハイテク化が進んで、世の中には普通の人では手に負えない物が溢れています。買ってはみてもほこりを被ったままになる物も多いと聞きます。これを使いこなせる実践力を備えた高専の学生は大変喜ばれる存在になると思ったのです。現在は、製造することに負けないくらい、製品を使いこなすことが大きな意味を持ってきています。将来研究分野や開発分野に進んでも、この力は推進力として働くでしょう。

学園だよりによれば、学校の方でも体験学習の場を増やすいろいろな工夫をしておられるようで、私は素晴らしいことだと感じています。学生の皆さんは積極的にこれに参加して、技術の基本を学び取ってください。さらに、若い皆さんはスポーツをしたり、自然に親しんだり、友達と語り合ったりすることも大切です。元気に行動して、周囲の社会に明るさを呼び込んでください。

長岡高専の力強い発展を心から願っています。

旧教職員

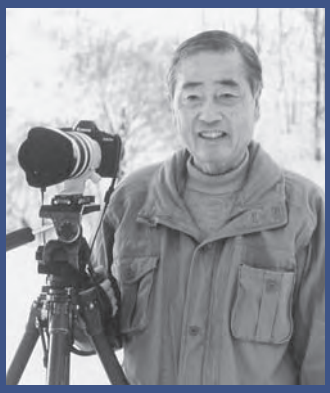
斉藤 俊郎さん

私の現在の生活は、趣味の旅行や囲碁を楽しんだり、ゆっくり本を読んだりすることが殆どです。退職当初には、食事会の運転ボランティアや、高齢者養護施設での囲碁対局ボランティアなどもやりました。貴重な体験になりました。

（写真）平成18年6月　潮来の「あやめまつり」会場で

School personnel — 3

高志台学園での思い出とさらなる発展を期待



旧教職員

羽賀 泰男さん

長岡高専には、昭和39年より平成11年までの35年間お世話になりました。退官後は、平成16年に誕生した魚沼市のビジョンについて検討する北魚沼郡合併ビジョン策定委員、手づくりの街づくりを目指して25年前に設立された、小出北部コミュニティ協議会の副会長などをしました。

趣味で始めた風景写真の撮影も10年になり、県展・市展をはじめ、写真コンテストでも、そこそこの成績を上げる様になりました。

学校での出来事として思い出すのは、学生準則についての紛争です。昭和四十五年六月二十七日に、田　健一校長および全教官と、学生の全学的集会が体育館で行われ、学生側より「学生準則撤廃」の要求が出されたのが始まりで、翌々日より授業休講の措置が取られ、学生の要求をめぐり連日のように教官会議が開催されました。中でも七月一日の会議では、深夜まで討議をしましたが結論が出ず、翌日の会議の夕刻に「白紙撤回受諾」が決まりました。また、各科別やクラス別討論会、学生集会等の会合が夏休みに入るまで続きました。夏休みが終わってから、紛争は一応収束しましが、新しい学生準則が制定・実施されたのは三年半後になりました。

次に、私的な事での思い出は、平成五年より二年計画で行った教育方法改善プロジェクト、研究テーマ「学校週五日制実施に伴う教育上の諸問題」です。これは、岡本祥一校長が平成三年度に「学校週五日制の試み」ということで全国の高専に先駆けて、本校が週五日制を実施したことに依るのか、校長がプロジェクトの主査を、私が副主査をすることになりました。

平成六年度の高等専門学校教員研究集会では、プロジェクトの中間報告書を基に、討議が行われ、岡本校長が基調講演・助言者を、私が講師・主査をしました。私自身、このプロジェクトの仕事に相当な負担を感じていましたが、終わってみれば高専が抱えている諸問題について知ることができました。

今後、日本が経済的に生き残るには、これまでのように、日本最大の強みである技術開発力に基づいた物造りです。今問題となっている経済発展と環境保全の両立を実現する技術革新が必要であり、この技術革新を担うことができる人材を育てることが大切です。高度成長時代に、実践的技術者の養成を目的として設立された本校は、この半世紀の間に、教育課程の改定、学科増設、専攻科設置と時代の要請に応えて推移してきており、既に約八千名の卒業生を送り出しています。

そして、今後の問題である少子化対策としては、機会ある毎に高専の特色を該当者に、多いに宣伝する必要があります。即ち、高専は専門的知識を学ぶ中で、基礎的学問、知識の重要性を知り、更にその上で専門的学問をするので、学問の意味を理解しやすい、言わば螺旋状に勉学の段階を上げていくという事です。もう一つの特色は、なお一層、上の学問を目指す場合、専攻科、大学編入、大学院等への進学と多様な選択ができることです。

最後に教職員、学生が一体となって、先輩が築き上げた業績と伝統をもとに、高志台学園が発展する事を大いに期待しています。

School personnel — 4

最後の卒業研究「講義・実験一体化教育」

―計測型机上実験装置の開発

旧教職員　加藤 才治さん

長岡高専校長（故）小川正二先生（当時長岡技科大教授）の推薦で、発足当初の長岡高専土木工学科に採用していただきました（昭和四十三年一月五日赴任）。実践的技術者の育成を目的に創られた学校であり、私にとって憧れの学校でした。

講義、土木実験・実習、卒業研究、ロボットコンテストへの出場（一、二、三回）等、思い出深い学校でしたが、実家（仙台市）の父親が倒れたため、二十三年在職した思い出深い長岡高専を退職しました。

その後、自宅から車で十五分程にある東北理工専門学校に勤務することになりました。実験実習は、土質実験と土木材料実験のみで、構造力学、水理学などは講義中心の授業のため、睡眠学習の学生が目立ちました。「講義・実験一体化教育」を目指して、実験装置を手作りするなど努力しましたが、本格化にまで進める事は出来ませんでした。その後、まもなく退職し非常勤講師となりました。

構造力学は重要な基礎科目ですが、理科離れと同様に構造力学離れも進んでいます。バーチャル教育（座学）からリアル教育（講義・実験の一体化）へのパラダイムシフトが必須であると痛感しました。従来の技術者教育では、講義と実験は切り離されており、講義内容の深い理解は、目と耳からだけでは困難と考えます。講義と実験（In Situ実験：その場実験）を一体化しイメージトレーニングを重視した授業にする必要があると考えます。

このような教育を実現するために「机上実験装置」を自費で製作することに決心しました。また、「計測型」でかつ学生一人ひとり（One To One）に対応できることが望ましいと考えました。これが「計測型机上実験装置」です。（今年度中に、全国専門学校土木教育研究会のご援助で、試用販売することになりました。）

これまでは、暗記中心で知識偏重の教育と言わざるを得ません。したがって、これからの構造力学の教育は、最も基本的な事項を「計測型机上実験装置」を利用するなどして教育し、教科の中間の発展部は要点を、最先端は展望を要約した「中抜き教育」を提案します。

以上が私の「最後の卒業研究」です。長岡高専は退職教官をも育てる歴史と深みの学校であった事を改めて認識し感謝します。また、金山技官、佐藤技官、茨木事務官その他多くの方に大変お世話になり、その片鱗もお返ししていませんが、ここに改めてお詫びすると共に深甚の謝意を表します。

School personnel — 5

長岡高専、人生の半分を過ごした場所

旧教職員　中澤　章さん

長岡高専には、昭和三十八年から平成十四年までの三十九年間、工業化学科、物質工学科に勤務しました。退職後、平々凡々と毎日を過ごしておりましたが、先輩諸氏が「そんな日々を送っているとボケが進行する」と心配して、第二の働き口をいろいろお世話下さり、現在は長岡技科大で産学連携研究員をやらせて頂いております。光陰矢のごとし、気づいて見たら、退職後丸九年が過ぎ去ろうとしています。

久しぶりに、『長岡高専二十年史』（昭和五十九年発行）を開いてみました。巻末の編集委員の皆さんの名前に懐かしさを感じながらも、すでに全員退官、その三分の一の方々は黄泉の住人、今更ながら寂寥の念に駆られています。高専在職中、一番印象に残っているのは、情報教育促進の一環として、ミニコン、HITAC-10が導入された時のことです。使用希望者が多く、しばしば、真夜中に順番が回ってきました。私もその面白さに取りつかれ、故坂田初三、故大橋　達、故桑原健一の諸先生（当時、工業化学科教授）のご配慮で、故上甲子郎先生（当時、東京理科大学経営工学科教授）の下で、品質管理とコンピュータの勉強を始めました。校務では、寮務と教務が長く、思い出が沢山あります。寮務は、授業終了後が勝負、寮生との話し合いが深夜まで続き、正直言って時にはげんなり、でも関　勝美さん（当時、寮務係長）初め、寮務係の皆さんが大変熱心で、お茶をご馳走になりながら、愚痴を聞いてもらったりしました。故小林武郎先生（物質工学科教授）が主事のとき、主事補として仕え、寮生への対処法をみっちり仕込んで貰いました。教務は、背丈以上の役割が次々と回ってきて、毎日、無我夢中でした。特に、入試は岡本祥一先生（六代校長）の指導下、長い間行われてきた「高専先願方式」から「高専、高校併願希望選択方式」に切り替えたため、大わらわの毎日でした。中学校の校長先生への説明会で、細部まで突っ込まれて青気吐息、辞退者が少なく、定員の大幅オーバーで入学させる羽目になったり、時には辞退者が多く、追加補充のため、中学校へ電話しても、担当の先生に相手にしてもらえなかったりしました。また、小川正三先生（七代校長）の下では、校舎大改修計画が持上がり、別途委員会を立ち上げたものの、なかなか進まず、往生しました。故佐藤勝久先生（当時、環境都市工学科教授、寮務主事兼務）が「知的キャンパスのプラニング」（日科技連出版社、一九九六年）という本を入手してこられ、いろいろ夢を語り合いましたが、先生の発想力には大変敬服したものでした（NHKのプロジェクトXに登場、日本有数の空港舗装の研究者であることを後で知った）。

最近、日本の若者の内向き論争が盛んで、ノーベル化学賞受賞の根岸英一教授の「若者よ、海外に出よ」との発言もあって、俄然クローズアップされています。近頃の世情は、NHK大河ドラマ「龍馬伝」の幕末にどこか似ています。幕末の立役者は若者たち、海外へ留学した若者たちがその後の日本を作り上げていきました。高専がどんな若者たちを送り出そうとしているのか、大変楽しみです。教職員・学生の皆さんのご奮闘をお祈りしています。

School personnel — 6

クラス担任でのある思い出

長岡高専の一、二年生時のクラス担任は一般教育科の教官が担当し、三年生以降は専門学科の教官が担当しました。副担任の形で相互に役割を分担し合うことはあっても、この基本的なパターンは現在も同様と思います。

昭和も四十年代後半のお話ですが、一般教育科教官のデューティとしてあるクラスを担任することになりました。このクラスの第一印象は、極めて活発で個々の学生が強い個性の持ち主であるということでした。

当時の入学時の合宿研修は巻町（現在は新潟市）にある県立青少年研修センターでした。このクラスのチームは屋内行事でのクラス対抗バレーボール大会で見事優勝しました。中学時にバレーボールで活躍した学生によるチーム編成と見事な試合運びによって手にした優勝は、以後のクラスの連帯感を強く意識させる最初のきっかけとなりました。

二年生の合宿研修は石川県の白山青年の家、獅子吼高原散策の後、白山比咩神社裏の流れに元気に泳ぎ回るハヤを誰かが見つけ、忽ち上着を脱ぎ捨てて川に飛び込んでの手掴み競争、川原での即席焼魚パーティの味は忘れられないものとなりました。後で禁漁区の看板に気がつきましたが時既に遅し！　この罪悪感少々のお楽しみイベントもクラスの連帯感をより強くする一因となったようです。

二年生、悠久山に桜満開の頃、春の高校野球大会予選、このクラスから四人の選手が出場し、授業をサボってのクラス総出の試合応援、球場のスピーカーから学校の授業に戻れとのアナウンス、今では考えられない一幕でしょう。この時は、準決勝戦まであと一歩のところまで進みました。

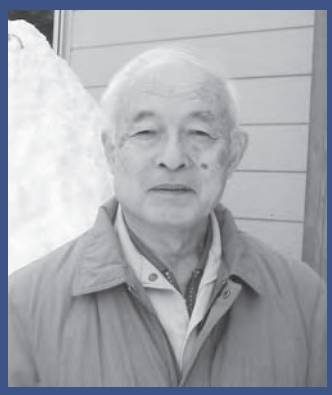
二年生も終わろうとする頃の修学旅行、京都から広島経由の四国行きコースの京都の旅館、彼等の部屋の巡回、部屋のドアを開けた途端、濛々たる煙に部屋の奥の壁が見えない程、勿論旅行中といえども学校内と同様に彼等には禁煙の筈。しかし、この一件は、クラス内の連帯感とそれに関連した行動の自己責任に対する議論を引き起こすことになりました。

他にもいろいろとありましたが、彼等に関わるイベント全てが、お互いの結びつきをよりよい方向に改善するきっかけとなっていたように感じられました。彼等がお互いの個性をしっかりと認め合い、尊重し合うことが背景にあったからと思っています。

彼等との二年間は、クラス担任とは何か、クラスの運営とは何か、に対して多くの貴重なヒントを与えてくれました。

彼等も今では五十歳後半に入りましたが、長岡高専在学時の固く結ばれた友情は、勿論、今も健在です。

彼等との数々の思い出は、担任経験の中でも最も強く印象に残るものであり、また懐かしくもあります。



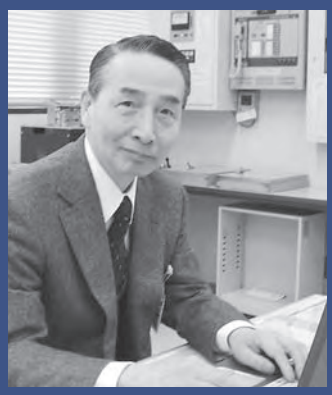
旧教職員

山口　肇さん

40年以上もお世話になった長岡高専も定年後、既に7年になろうとしています。「光陰矢の如し」を実感しています。非常勤や学生実験のお手伝いを楽しんでいます。若い人達との付き合いは気持ちを若く保つ秘訣です。

School personnel — 7

退職後も先生方や卒業生の皆さんに感謝



旧教職員

有本 匡男さん

長岡高専には昭和39年から平成17年までお世話になりました。退職後は、ながおか新産業創造センターでセンター長を勤めています。その傍ら、平成23年から新潟大学大学院技術経営研究科に通学しています。

私は、高専を退職する前の数年は、地域交流室や協力会の立ち上げ、テクノセンターの誘致に関わり、地域企業との共同研究や技術相談に対応していましたので、退職後は地域企業のお役に立てる仕事をしたいと考えていました。そんな折、長岡市の当時の久須美商工部長から、平成十六年十月に長岡市が「ながおか新産業創造センター」を開設するのでセンター長をやってほしいと言われ、非常勤で週二回の勤めをさせて頂き、平成十七年四月高専を定年となってからは、非常勤嘱託員として週三日の勤務になりました。

当センターはインキュベータで、起業間もない企業を入居させて支援し市内に工場を作って頂き、地域振興や雇用につなげようとする施設です。センターでの仕事は管理運営が主務ですが、技術的な支援から販路開拓、資金・人材獲得まで、必要に応じて活動しています。技術的支援では、企業の製品開発に役立ったり、長岡技大の末松教授の研究に参加させて頂いたり、ラジオ出演などもあり、充実した日々を過ごしています。また、長岡大学の「ベンチャー企業論」や「起業家塾」の中で話をさせて頂いています。「起業家塾」では、技大、長岡大、高専の学生が混合チームを作り、そのビジネスモデルを競うものですが、高専の学生の発想力や統合力はすばらしいものがあります。これまでのビジネスグランプリ等での高専の学生の高い評価を考えると、起業家教育を充実して頂いたら長岡高専の特徴となるかもしれません。学生が卒業し技大あるいは大手企業で経験を積んだのち、長岡市内で起業し、市の活性化に大きな力となることを期待したいところです。

平成十九年から長岡技術科学大学テクノインキュベーションセンターにも週一日の勤務をしています。こちらには四つのブースがあり、大学のシーズをもとにした学生ベンチャーが入居しています。私は、大学発起業支援、技術相談等を担当しています。

これらの活動を通じて、ありがたいのは人と人とのつながりです。企業をお訪ねすると、高専時代の教え子が社長であったり、偉い肩書の名刺を頂いたりします。また、高専や技大では教え子が教授をしているとか、事務官にも高専時代の顔見知りが多く、いろいろなことが円滑に運んでいます。ありがたいことです。

最近は、技大の図書館や食堂で技大に進学した教え子から声をかけられることが、段々と少なくなり、高専を離れてからの年月の長さを感じますが、ロボコン放映や学園便り等で学生たちの活躍や、技大や地域企業との共同研究等で先生方の活躍を拝見するにつけ、高専での生活が思い出されます。若く能力の高い多感な学生たち。研究と学生指導に熱心な先生方。高専はすばらしい学校だと思います。高専の未来に幸あれと願うばかりです。

School personnel — 8

建学の精神を伝えて元気な学生と共に

学校創立当初は明治生まれの気骨ある先生や、大正生まれの人間味あふれる先生、昭和初期の誠実な先生等の講義や卒研・コンパ・学校行事等で様々な影響を受けました。当初は三学科四学級で、その内二学級の半数が機械工学科学生で、良くも悪くも大きな影響を及ぼしたようです。学生は、そうそうたる教授陣と実践力重視という建学精神の影響を受けて育ちました。例えば機械設計ハンドブック（便覧）」でした。やや型破りで、しかし実際の設計者用には、これ程適切なテキストはなかったでしょう。これ一冊あれば機械設計上のほとんどの問題に対応できたはずです。他の科目も同様でした。初期の卒業生の多くが、後に大きな活躍をしている事実は、これらから来ていると思います。講義以外にも、肌で接する社会人教育や人間教育がなされていました。また、当初は毎年科の教職員旅行も実施しており、懐かしい思い出です。

さて、昭和五十年頃、私が焼き物趣味に手を出したことがありました。機械工学科の池田光知先生が茶道部の顧問をされており、学生主事で多忙のため、茶道部の顧問を頼まれました。茶道部は開学当初に機械工学科学生が自主的に立ち上げた男性中心の部で、先生は石州流野村派家元になられた堀政晴・静江先生ご夫妻でした。私は何も知らずまごつきましたが、当時の中心部員は機械工学科の学生三人で、彼ら曰く、「我々が全てやりますから、先生はただ見ている程度でいいです」。なるほど先生顔負けと言える素晴らしい活躍でした。卒業後、一人は東工大に編入後大企業へ、一人は長岡技科大を卒業後教官となり名教授に、一人はコンピュータ関連企業に就職しました。その後も新潟学生茶会や青年の家を利用した合宿研修等、茶道部の活躍が続きました。

その後堀先生が住居を移転され、部員が週一回先生の茶室へ通いづらくなりました。特に車規制が厳しく相乗りができなくなり、バスを乗り継いで通う困難から部員も減りました。寮生が主になり、新潟学生茶会費用や練習費用も掛るため苦労し、またクラブ関連の方針変更があり、事前に顧問に話が無く、若干のトラブルの後、部員が辞めてついに廃部となり残念でした。しかし、元部員が長岡技科大で茶道部を作り、今も活動しているのは朗報です。

開学当初から、学生が何事にも積極的・自律的に計画・運営してゆく伝統と雰囲気があり、私はそれが卒業後の活躍の原動力になっていると信じています。創立五十周年記念にあたり、お祝いの言葉と共に、今後も元気で活気ある高専を維持して欲しいと願っております。

旧教職員

小林 雅隆さん

長岡工業短大卒業後、引き続き長岡高専には昭和39年から平成18年までお世話になりました。退職後は、新潟産業創造機構テクノプラザ人材育成コーディネータ、長岡技術科学大学NTIC・RM、長岡高専特命教授等を務め、現在CAE関連人材育成コーディネータ継続中です。

School personnel — 9

「栃電」悠久山線・「キュポラ溶解」・「狸汁と猪鍋」

歯車加工の講義
平成元年　ラオスの首都ビエンチアンにて

「栃電」長岡駅を起点に、高校前、大学前等、街中の駅をいくつか経由して終点悠久山駅に至る栃尾電鉄悠久山線のことは、記憶が薄らいでしまいました。昭和四十八年の廃線から四十年にもなろうとしています。お世話になった機械工学科主任教授の菅原寿郎先生が毎日「栃電」で通勤されていたことを思い出します。

私が機械工学科に赴任したのは昭和四十二年四月のことでした。その数日前の三月末に、長岡工業高等専門学校の第一回卒業式が挙行されており、学内にはまだ祝賀の空気が漂っていました。

当時、機械科の学生は第一学年からの三年間、三角屋根の機械工場と鋳鍛工場とで行われる実習科目を課せられていました。この科目の担当は工場長でもいらした木村教授があたり、実質的な指揮を助手の河本さんがとっていました。河本さんと工場付の技官は、機械工場内の「工務室」と呼ぶ部屋に詰めていました。工務室では毎年シーズンになると、猟銃をやっておられた技官の廣川金治さんが狸汁や猪鍋などを振る舞ってくれました。私は「歯車形削盤の分解組立」、「ホブ盤による歯車加工」、それに吉岡技官のお手伝い役を務めた「キュポラ溶解」等いくつかの実習項目を担当しましたので、頻繁に工務室を出入りするようになりました。そんなことで、狸汁や猪鍋を見逃すことはありませんでした。

二号館二階の機械科会議室は、昼食時には、さながら「力学道場」の様相を呈していました。材料力学の高木先生、熱力学の池田先生、精密測定の穂苅先生、制御工学の斉藤先生、流体力学の五十嵐先生、それに助手の藤田さん、小林さん等が参集し、力学談義が交わされていました。問題の提起は藤田さんによることが多かったように記憶しています。

機械工場の片隅に、埃を被った工作機械が眠っていました。「戦時中、ドイツから潜水艦で運ばれ、長岡の空襲で炎を被っている」という、いわくつきの機械でした。「クリンゲルンベルク曲歯傘歯車歯切盤の分解組立」と題して卒論のテーマに取り上げたのは、卒論を担当して間もない頃のことでした。

昭和四十七年、東北大学・酒井教授等により発表された難解な論文「食違い軸歯車の二度接触に関する考察」（機論・昭和四十七年七月号）は、国内外の歯車研究者にセンセーショナルな衝撃を与えました。私が本論文に接したのは、その翌年で、これを契機に食違い軸歯車の研究に舵をきることになりました。

平成十九年三月に退職して五年が、晴耕雨読の生活に入って一年が過ぎようとしています。「栃電」悠久山駅から見た桜の風景、職場での「キュポラ溶解」、「狸汁と猪鍋」のこと等、特に赴任直後の数年間を懐かしく振り返っています。

さらに百周年に向け、長岡工業高等専門学校の一層の御発展をお祈り申し上げます。

旧教職員
廣川 純夫さん

長岡高専には昭和42年から平成19年までお世話になりました。退職後は、本校嘱託教授、㈱太陽工機開発部顧問を勤める。現在は晴耕雨読の生活。

School personnel — 10

楽しかった研究室の山菜採り・山菜パーティー

十七年間の在職中、常に心がけていたことは、「いかなる学生も、何らかの自信を獲得して卒業してもらいたい」という思いでした。多くの学生は勉強すればするほど、教育を受ければ受けるほど、自信を得るというより、むしろ逆に挫折を感じ、自信を失うことが多々あるものです。私は教員として自身の体験・経験から、学生が自信を獲得する場は卒業研究が一番適していると考えました。問題を提起し、それを解決するアイデアを提示・実証し、ある新規な事項を帰納・演繹するという一連の研究作業を、一年間という限られた期間に学生自身が身をもって体験し、最後にその成果を発表して評価を得るという卒業研究の場は、学生にとって自信をつける貴重な一つの成功体験でもあります。

五学年の新学期開始直後、そんな卒業研究の研究室配属があります。私の研究室での最初の行事が「山菜採り・山菜パーティー」です。この行事は地震直後を除いて、赴任以来毎年必ず行ってきました。学校の裏山（栖吉）で山菜を採り、研究室に帰って山菜を料理し、皆で会食しながら色々の話をしあうことにより、たった一日という短時間のうちに、個々の学生の考え方や性格を見抜くことができ、また学生同士の連帯感も得られました。そんな楽しかった研究室の山菜採りの写真を一枚ご紹介し、拙文に代えさせて頂きます。

最後に、在任中一二四名の卒業生の研究指導の他、思い起こせば赴任直後の電子制御科の立上げ、学生寮の管理運営、専攻科の立上げ、二回のクラス担任、数度のJICA国際協力事業等、多くの経験をさせて頂きました。ひとえに本校教職員の皆様方のご指導ご協力の賜物と感謝しております。最後に本校五十周年記念にあたり、益々の発展と皆様方のご活躍を心からお祈り致します。

旧教職員

反町 嘉夫さん

平成4年から21年までお世話になりました。退職後はもっぱら孫の子育てを手伝い、一日無事過ごせた証の晩酌を毎日楽しみにやっております。0才から9才までの7人の孫を相手に、「言って・聞かせて・やって見せ、そして褒めて」やった時、嬉しそうな彼らの輝々とした眼を見ながら、新ためて教育の原点を見る思いの毎日です。

School personnel — 11

柔道を通し学生から得たもの

昭和四十七年、大学を退職し長岡高専に赴任した私がまず考えたことは、五年計画での全国制覇と云う目標でした。まだ若く生意気だった私に対し、新任緒方の鼻をへし折ってやろうと掛ってくる学生と、お互いに連日必死の稽古でした。ところが、全国大会直前の稽古中右大腿部を強打し、痛いともいえず、そのまま足を引きずりながら稽古を続行しました。全国大会が終わっても腫れが引かず正座も出来ない状態が続き受診したところ、悪性腫瘍の疑いがあり、最悪大腿部の切断と告げられ目の前が真っ暗になりました。長岡には知り合いもおらず結局東京での入院・手術となりました。当時の橋本先生は車椅子での授業も考えて居られたとか…学生を始め周りに心配をかけた長岡での教員生活スタートの年でした。

四年目、団体は準優勝、個人で居城が優勝。五年目は地元新潟での全国大会、願ってもない筋書きでした。しかし団体はまたしても準優勝、個人で富山が優勝（昭和五十二年も優勝）、その後も全国大会出場の常連校にはなるものの、団体では予選リーグで敗退。個人では五十八年に笠原、平成二年に小熊が優勝しましたがそれ以外は二位、三位入賞のみの連続でした。その間、橋本先生のバスケットボール、久保田先生のバレーボール、山井先生の陸上が全国制覇を成し遂げており、自分自身の指導力の無さを痛感し、思い悩んだ時期もありました。

平成四年、長岡高専柔友会（OB会）が監督就任二十年を家族とともに盛大に祝ってくれました。何の指導力もない自分に対する思いに、嬉しい半面、申し訳なさで一杯でした。何とか会友の気持ちに答えるにはやはり「全国制覇」しかないとまた五年計画で取り組みました。四年目（平成八年）団体三位入賞、五年目（平成九年）集大成の年、くしくも私が全国高等専門学校体育協会、柔道専門委員長に就任したその年に、学生が素晴らしいプレゼントをくれました。この時のメンバーで柔道経験者はポイントゲッターの鰐渕一人でした。予選を圧倒的な内容で決勝戦に進みましたが、決勝戦は鰐渕選手が上げた一点を守り切り、一対一の内容差で念願の初優勝ができました。（鰐渕は個人戦でも優勝。十一年度も優勝。その後も国体・全日本ジュニア等の大会に出場し、柔道選手として最高峰の全日本柔道選手権大会に常連選手として今も活躍をしています。）

近年では、学生の大会で増田が全日本学生柔道体重別選手権大会に、女子では山崎・若月が全日本学生女子団体戦・三人制で日本武道館の畳の上に立ちました。多くの学生が高専入学後から柔道を始め、至らない指導にも関わらず、経験実績がなくとも全国高専のトップに立てるし、大学生の大会でも同じ畳の上で戦えることを証明してくれ、彼らの持つ可能性と、ひたむきに努力することの素晴らしさを教えてもらいました。三十八年間の指導の中で、団体・個人の監督として三十六回も全国大会に連れて行ってもらったのは、私の最高の宝であると学生には感謝しています。

これからも気力、体力の続く限り柔道を中心に、スポーツを通し青少年の健全育成に努めていきたいと思っています。（敬称略）

旧教職員

緒方 和男さん

昭和47年から平成22年までの38年間お世話になりました。
退職後は、新潟大学教育学部の非常勤講師を勤める傍ら、県・市の体育協会役員、蒼柴スポーツクラブ代表、キッズ柔道教室の開催等、スポーツを通して青少年の健全育成に努めております。

School personnel — 12

駆け抜けた三十三年の記憶

旧教職員

佐藤 和秀さん

昭和52年から平成22年の33年間を長岡高専に正式在職、今2年間延長で在職中です。長岡高専の50年の歴史で、多くの教職員が暮らし、多くの学生が駆け抜けていきました。多くの出会いに感謝する最近です。何らかの縁で残ったものが歴史として記録されていきます。これから10年後、50年後の長岡高専はどんな歴史を刻んで行くのでしょうか。

①雪氷センター

昭和五十二年、赴任した春、田校長に呼ばれ、「全国に高専があるが、これからは各々特徴ある高専にしなければならない。あなたは雪が専門とか、新潟県特徴の雪や低温に関係した研究施設を考えてくれないか、全学を捲き込んだ教育研究ができるように」と言われました。次の大戸校長、池田校長、菊地部長も精力的にプッシュされ、難産の末、氷点下三十五度からプラス十五度まで設定できる、高専では全国唯一の「雪氷・低温技術教育研究施設」（雪氷センター）が昭和五十五年に建設されました。

②南極行き

土曜の昼過ぎ、学校裏の官舎に帰っていたら、すぐ学校にと科主任から電話があり、一緒に大戸校長のところに行くと、「土木工学科は何を考えておるか？　南極観測は国家事業である。こんな田舎の学校に観測隊員を依頼されて断るとは何事か?!　バカもーん！」。「私の責任で行くようにします」と科主任。その前に科の先生から「科全員が南極に行くのは反対だ。反対を押し切っても行くなら、帰ってきても席がないものと覚悟して…」と。「そこまでして行く気はありません」と南極行きは諦めていました。二十二次観測隊の南極氷床の熱収支観測で経験した氷点下六十六度は、当時の日本隊の新記録となりました。その後、氷河研究でパタゴニア、スピッツベルゲン、アラスカ、モンゴル、ヒマラヤ等へ行くことができました。

③幻の「教授会」

大戸校長の後、本校に赴任された池田校長に雪氷センターのことで伺い、いろいろな話の後、「教授会」の話になりました。「これまで一度も開かれたことがありません。いつも名君の校長なら問題ないと思いますが、ヒットラーみたいな方が来られたら堪ったものではありません。長い目で見たら、今の高専のシステムはあまりよくないと思います」「私もそう思う。ここに来て驚いた。予算権、人事権などの権限がこれほど校長に集中してよいのだろうかと」「是非改革していただきたいと思うのですが」「考えてみたい」。一年後、校長と話する機会がありました。「一年前の教授会の話を覚えておられますか」「覚えている。しかし、とてもこの教授に任せられない。頼りなくて」「それは当然だと思いますが。これまで何もさせられていないで、急にやれといわれてもすぐにはできません。時間を少しいただかないと」。その後、どの校長の時か、組織規定から「教授会」は削除されました。

④中国との姉妹校

北陸農試の大沼匡之さんの縁で、哈爾浜の黒龍江水利専科学校と姉妹校を目指すことになりました。一緒に行く予定の高橋校長が行けなくなり自分一人で行くは

めに（航空運賃三十万円は自費で大変でした）。お土産のパソコンが北京空港で捉まり、一時間もの問答の末、何とか通過、無事、手渡すことができた哈爾浜の王校長は、中央政府何するものぞと労って下さいました。COCOMの対共産圏輸出規制の厳しい時代でした。「中日はいろいろなことがあったが、それよりも未来に向かってお互い友好を深めていきましょう」と王校長。まもなく姉妹校の締結をし、雪氷災害共同研究では、今西錦司、梅棹忠夫等の大興安嶺探検の最北の地「漠河」に彦先生は連れて行って下さり、氷点下四十度で雪試料を採取できました。姉妹校の交流中、兌換券の中国社会は天安門事件、鄧小平後の劇的な変貌がありました。

⑤高専での研究

高専で科研費をとる人も少ない頃、科研費を面倒みる部署は学校にありません。自分で予算管理し、預金通帳を作成し、年度末、利子が一円単位でつくので、雑貨屋で釘数本を買って通帳残高をゼロにしました。最初の頃は学会参加も苦労しました。研究発表なしに聞きに行くだけの辛さ。大学や研究所で一年でやれることは高専では三年位でやるしかない、と居直りました。外部からの研究資金情報は殆どない時代、科研費が時には当たるようになりました。学会や研究会参加は夜行バス利用で参加しました。一瞬でも異次元の世界に浸り英気を養って帰る。今は羨ましい位の良い時代になりました。私に幸いなのは学内外に心から話を聞いてくれる人、聞かせてくれる人が居るからです。そんな方から有形無形の知恵と勇気と元気を頂いてきました。

⑥教育と卒業研究

最高の「教育」とは学生と先生が火花を散らすことができる時と言われますが、これまで満足できた授業はわずかです。学生とのより親密なつきあいはクラス担任とクラブ活動と卒業研究。卒業研究は自主性を重んじました。研究の根本がそこにあると思うからです。特に酸性雨観測を二十年以上も継続した卒研生を誇りに思うと同時に、彼らが何か大切なものを得たと確信しています。学生は在学中に大きく成長します。そして、教員も学生に成長させてもらう。学生から考えさせてもらい勉強させてもらいました。今はそういう感慨が強い。卒業生の仲人をさせてもらい、年賀状をもらい、教員冥利につきる、感謝の気持ちでいっぱいです。

⑦談話会

長岡高専は五つの単科大学が互いの交流は殆どなく、一つの建物にいるだけという感じがしました。高度の専門を持つ人が直近にいるのにもったいない。そんな思いから、面白そうな先生の話を聞く「談話会」を始めました。専門の研究の話、外国帰りの先生の話、退官記念講演など、面白くて知らない世界を教えてもらうなど、多くの元気を私自身は頂いてきました。

⑧これからの高専

学生時代から学んだことは、常に批判的精神を持て。そしてよりベターな方向を見いだせ、でした。言葉を換えれば、まず発信せよ、そこから始まる。ここが常にそんな環境だったわけではありません。同じ事でも、上から言われてと、下からやるのでは全く違います。より困難な時代に、下からの地に足がついたことがうまくいくかどうか、そして、その仕組み作りがうまくいくかが、高専のより良い存続に関係していくことでしょう。

School personnel — 13

ロボコンマシンを機械実習工場で作っていた頃の思い出

旧教職員

土田 健一さん

昭和46年から平成16年まで機械工学科で実習と実験担当の技官として御世話になりました。現在は新潟の専門学校で非常勤講師として勤めているほか、地域のボランティア活動に参加しています。また、健康維持のためスポーツクラブに通っています。

在職中の思い出として、特にロボコンのことが印象に残っています。少し手伝いをしただけなのですが、楽しかったことや苦しかったことなどが思い出されます。

私がはじめて機械工場でロボット製作を目にしたのは平成二年頃ではなかったかと思います。私たち技官の居室は機械工場内にありましたので、ロボコンの時期になると、ロボット作りのために機械工場を訪れる学生の姿が多く見られました。その頃は、機械工場の片隅を借りての作業でしたから、納得の行くロボットの製作は難しかったのではなかったかと思います。また、当時は毎年ロボコンに参加する学生を募っていましたから、経験を積むことが出来ないうえ、難しい課題で皆苦労していたのではないかと思っています。その後しばらくして、良い環境で活動が出来るようにと顧問の先生方のご尽力で、間借りではありましたが部室での活動が出来るようになりました。私が手伝いをするようになったのはこの頃からで、地区大会や全国大会の応援にも何回か参加させて頂きました。なかでも長野で地区大会が開催されたときのことを良く覚えています。いつものように大会のルールが発表されると顧問の先生の指導のもと製作に取り掛かりました。最初は順調に進んでいるように見えたのですが、意外に難しく思うように進まないため作業も深夜まで続くことが多くなってしまいました。出来れば大会の前にテストをして万全な態勢で試合に臨むことが理想的ですが、全体的な動作テストまであと少しというところで長かったロボット作りも最終日となりました。その日の夕方には出発する予定で最後の作業をしたのですが、遅れを回復することは出来ず夜半まで作業が続きました。車への積み込みと、空模様が良くないためロボットをシートで覆うなど意外に時間がかかってしまいました。積み込み作業が終わった頃には夜が明け、朝六時頃にようやく出発しました。試合会場に着いてからも調整などの作業が続き、なんとか形にして試合に臨んだのですが、不本意な結果となってしまいました。しかし、学生はロボット作りを始めた頃からの緊張から解放され、また、大会が無事終了したことで来年こそはと気持ちを新たにしたのではないかと思っています。

振り返ってみますと、この長野の地区大会へ向けて活動を始めた頃から部員のロボット作りに対する意気込みが感じられるようになりました。その後の大会で、素晴らしいメンバーの活躍もあって、最高の成績を上げることが出来たと思っています。このような先輩の築き上げた基礎を大切にし、ロボティクス部の益々の活躍を期待しています。

最後に、関係の先生方には大変お世話になりお礼申し上げます。また、ロボット作りに関わらせて頂き大変良い思い出が出来たと感謝し、もう少し積極的にお手伝いが出来ればよかったのではと反省しています。

School personnel — 14

ひとりごと

中越地震から六年になりますが、当時インターネットで長岡高専の惨状を目の当たりにしビックリしました。あの頃は高専の危機が囁かれていました。教職員の間で、本校が近隣の高専や大学に吸収されるなどという噂が飛び交っていました。内部では人員削減、予算の削減という話があり、そんな中で、長岡高専はつぶされるかもしれないという話まで出たくらいでした。立派に復興してよかったと思います。

＊

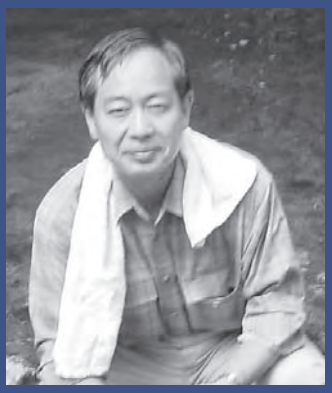
あるとき、テレビをつけたら乙武洋匡さん（『五体不満足』の著者）がでていました。その時の話が、「その小学校には、バレンタインに、学校にチョコレートを持ってきてはいけないという決まりがあったそうです。何故ですかと、他の教師に聞いたところ、もらえない生徒がいると可愛そうだということだそうです。」というものでした。その時、乙武さんはせっかくのチャンスを学校教育は失っていると思ったそうです。その子供がもてないことを自覚するチャンスだったのに。

私もかねがね、こういう積み重ねが生きる力になるのではないかと思っていました。この不確かな時代を生き抜くには学校の勉強だけでなく、個々が普段からいろいろな試練を積み重ねることが必要だと思っています。科学的なことは教えることができますが、生き抜く力は、自ら学ばなければならない。木でいえばしっかり根っこをはり、年輪を重ね成長することだと思います。

学校や家庭では時間や効率を考えると、ついこのような対応になってしまいがちです。社会も同様で効率を求める反面、無駄や失敗が敬遠されがちですが、気長に育て、自らの力で生き抜くことができにくくなっているようです。子供の考える力や創造力がつきにくくなると思っています。若者には失敗を恐れず果敢にチャレンジしてもらいたいと思います。若者には社会を変え、新しいものを生み出す力があるはずです。

以前、高専教育に中だるみ現象があり、問題視されたことがありました。今はどうでしょう。逆転の発想で、この中だるみを逆手にとって、自らが、自らの足で歩む、自ら考えることを実践してもらいたいと思います。この不確かな時代を生き抜くために必要な力を養ってもらいたいのです。

ユニクロの社長が、「今まではサラリーマンの時代だったが、これからは自営業者の時代だね」と言われました。自営業者のごとく振舞うことのようです。私が、このことに気づいたのは退職五年前です。随分遠回りしました。水戸黄門に八兵衛がいなかったら面白くないでしょう。ドラマ「竜馬伝」では、岩崎弥太郎が主役をおびやかすような存在感を示しました。社会や組織には必ず自分の働き場があるはずです。



旧教職員
辻　満男さん

昭和38年に長岡高専に勤めることになりました。事情があって、平成元年に小山高専に転出しました。長岡高専には26年間お世話になりました。平成17年3月、小山高専退職。現在は、家庭菜園とバラづくり、そして野菜作りを楽しんでいます。バラは美しい花が心を和ませてくれます。

School personnel 15

今は昔　私の二つの　ほっ

ひとつ。昭和四十六年、図書係に採用されてすぐ、四号館四階から、竣功なった課外活動センターの二階に引っ越しとなり、五万冊の図書の移動が開始されました。この本はあそこに、この本はここにと図面を引き無事におさまるかしら、とドキドキ。日通のクレーンと職人さんがどーんとやってきて、本をコンテナに詰め、四階から二階へ空中移送。書庫の間をあちこち走り回り、所定の書架にようやくおさまりました。ほっ。

ふたつ。昭和六十三年、電算化の波が押しよせ、さてさてどうしたものかと思案なげくび、強力な助っ人を二人得て始動、十万冊に増えていた図書のＩＤを夜中までかかってプリントアウト。これが読みとれなかったら、三人で弁償だね、と冗談ともつかない話をしながら、これもドキドキ。

図書に貼付するのに学生アルバイトを頼みました。みんなとても一生懸命働いてくれて、頼もしかったですよ。そして学生証と共用の貸出カードと図書ＩＤを読みとれた時も　ほっ。

国立科学博物館「空と宇宙展」で〝はやぶさ〟の実物大モデルを見学しました。意外に小さな〝はやぶさ〟の中に科学技術の粋がぎっしりつまっていたんですね。

科学技術者の卵さんがいっぱいの長岡高専ますますのご発展を祈っています。

恒例八方台登山の写真です。山の幸をとったり、学生の味噌汁を分けてもらったり、汗を流しました。年をとるにつれて来年もまた登れるかね、と皆で言い交していました。

さて、誰だかわかるかな?

旧教職員

金澤 勝子さん

平成16年に退職以来、学生時代の友人と旧交を温めたり、美術館・博物館を訪ねたり、スポーツクラブに通ったり、（なかなかお腹はへこみませんが）ふうわり、のんきに過しています。

えっ　お酒?　弱くなりました!

長岡高専への熱きメッセージ

School personnel — 16

四十二年間勤務の中であれこれの思い出

長岡工業高等専門学校創立五十周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

秋も深まった十月末日、ドドーンという音で窓を開けると、澄みきった夜空を色鮮やかな花火が打ち上げられていました。「あっ！　高志祭の花火だ」と思わず声をあげ花火を見ながら勤務していた頃を懐かしく思い出しています。

昭和三十八年五月、初めての勤めで何も解らない私は不安で一杯でした。庶務課庶務係勤務となり、その当時は郵便物を運転手の方と一緒に本局まで取りに行き各教官室まで届けたものです。当直用の布団カバーを取り替えたり、電話交換手の交代をしたり、和文タイプを習い公文書作成等をした事が懐かしく思い出されます。

昭和四十三年全国的に学園紛争が波及し、昭和四十五年長岡高専も制服、制帽問題等不満の蓄積から学生準則の撤廃要求が出され、授業も休講となる事態になり、連日教官会議が開催され、深夜まで会議が行われた時は夜食を用意した事がありました。

会計課用度係で一番印象に残っているのは、校内の清掃業務を業者委託する事となり契約書作成のため数日間巻尺を持って廊下、講義室等の面積を測ったのが思い出されます。

会計課出納係では、私個人では小切手を使う事などない生活の中で初めて経験する小切手作成は、かなりの緊張感と失敗もありました。

学生課教務係では学生の進級、卒業等に関係する成績一覧表作成の時、一点の間違いが学生の進級、留年を左右するため、各教科の点数読み合わせの時は教務係みんなが緊張しながらやりました。また、平成十六年の中越地震の時は、毎日学生と連絡を取りながら安否確認や被害確認をし、学生の元気な声を聞くとホッとしました。

学生課寮務係では事務職員というより母だったような気がします。病気の時など心配で保護者の方が来られるまで病院で待っていました。どうやったら寮生活を快適に過ごしてもらえるか、保護者の方に安心して任せてもらえるかそんな事ばかり思って勤務していたような気がします。

平成十七年三月三十一日、『長い間ありがとうございました』校舎に向かい、四十二年間のお礼と感謝を込めて頭を下げ学校に別れを告げた時、涙がとめどなく溢れ出た事が昨日のように思い出されますが、もう五年以上が過ぎたんですね。

何か取り留めのないことばかり書きましたがお許しいただき、今後の益々の長岡工業高等専門学校の発展をお祈り申し上げます。

旧教職員

安達 征子さん

昭和38年5月から平成17年3月31日まで事務職員として勤めさせていただきました。退職後は、地域の食事ボランティア活動をし、また近所の皆さんや高校時代の友達とお茶を楽しみ、最近民謡をちょっと習い始めたところです。

Alumnus 1

卒業研究から与えてもらった人生の進路

高専への受験を決めたのは、中学三年の高専入試の二ヶ月前の事でした。私には弟がおり、父親としては二人とも大学にやるほど家庭には余裕がなかったので、私を工業高校にやる予定で、私もそのつもりでいました。ところが、中学の担任の先生が、「高専なら大学より二年年数が少ないので高専に進ませたらどうか！」と、私の父親を説得しました。

入学してみると、設立三年目の長岡高専は、私には全てが生き生きと見え新鮮でした。寮生活等で接する上級生が、光輝いて見えた事を今でも鮮明に記憶しています。同じように、私の同級生も勉強に励む者、クラブ活動に集中する者、それに学校外の活動に精を出している者もいました。とにかく皆、楽しく学生生活を送っていました。

ところが、極めて単純な理由で高専に入学した私は、他の同級生と同じように勉強に励む事もなければ、学校のクラブ活動に集中する事も無く、平凡で目立たぬ学生生活を送っていました。

しかし、転機は五年生の時にやってきました。それは卒業研究です。私たちの時代は、卒論の研究室選びや、その研究室内でのテーマ選びも成績優秀者に暗黙の優先権がありました。結局、私の卒論のテーマが決まったのは一番最後の頃でしたが、そのテーマに私は、結構わくわくしたのを憶えています。テーマは「回転角のデジタル化」でした。アナログ全盛の時代で、デジタルとかコンピュータなどという言葉は、全くと言ってよいほど耳にする事のない時代でしたので、このデジタルという言葉に不思議な響きを感じました。担当の先生の「このテーマは、私もやった事がないので、全て自分でやってくれ！」との、この言葉には益々私をかりたたせるものがありました。

相変わらず、授業は一生懸命ではありませんでしたが、卒論のための勉強は一生懸命やりました。結果は、回転角検出のセンサーの開発も、それをデジタル表示する回路開発にも全て失敗しました。しかし、私にとって長岡高専五年間で、もっとも楽しく有意義に取り組めた一年間でした。振り返れば、この卒論のテーマが私の人生を決めてくれたような気がします。

この卒論をやりながら、私はデジタル技術、コンピュータ技術の本場アメリカに行きたいと、何となく思うようになっていきました。そこで、就職先は学校に求人がきていない外資系のコンピュータ会社に手紙を出し入社することになりました。後に「いつか、新潟からアメリカに進出しよう！」と一人で新潟でコンピュータ関連会社を起業する事になるのですが、これも今にして思えば卒論が原点だったと思います。

長岡高専を卒業し、気がつけば六十才を超えていました。少し遅すぎるかなという気もしますが今、新潟からアメリカに向けて、少しずつビジネスを始めています。在校生の皆さん、いつの時代も志を大きく持ち、情熱をもって努力を続ければ道は開けます。厳しい時代になりましたが、皆さんの一人ひとりの志が世の中を変えていきます。皆さんの志に大いに期待しています。

同窓生
渡邉 正則さん
高専電気第3回（昭和44年3月）卒業。新潟県新潟市西蒲区（旧西川町）生まれ。卒業後、沖ユニバック㈱に入社。昭和55年独立。㈱エフ・アイ・ティ代表取締役会長を歴任し、平成22年、販売会社とHoldings会社を設立し、JASDAQに上場。現在、同社取締役相談役。

長岡高専への熱きメッセージ

Alumnus — 2

独創の技術エンジニアの生き甲斐

―世界と闘った幸せ

昭和43年
八方台へ遠足

もう半世紀も前の話ですが、私の高専五年間は高度経済成長、学生運動、アポロ月面着陸、三億円事件、ミニスカート流行など激動の時代でした。でも個人的には、八方台への遠足や高志祭、悠久山でのスキーや花見、先生とのソフトボールなど、楽しい思い出がいっぱいです。アットホームな雰囲気もあり、よく遊び、よく学ぶにはとても良い環境だったと思います。

私がいた頃の長岡高専は、機械・電気・化学の三学科があり、私は工業化学科でしたが、就職先はトヨタ自動車を選びました。これは大正解でした。

当時は大気汚染が大問題になっていて、世界中が排気浄化に血眼になっており、私も「化学の知識を活かしたい」と、その仕事を希望しました。

自動車の排気は、エンジンに供給される空気と燃料量（空燃比）の影響が大きいので、私は〈空気＋燃料→排気〉の燃焼反応式を立て、排気組成から空燃比を逆算する手法を編み出しました。今も広く利用されています。

排気中の有害成分（CO・HC・NO_x）は、空気と燃料を等量比に適合すれば、触媒で同時浄化できることが分かり、私はシステム構築して、電子燃料噴射や酸素センサを駆使し、触媒浄化率九〇％超を達成して、世界初の実用化に成功しました。これは今も、排気浄化法の主流になっています。

次は燃費の改善（CO_2低減）です。エンジン改良により希薄燃焼が可能になったので、私は燃料噴射の精密制御や点火系の強化等の改良を加えて、性能向上し、市販化できました。この希薄燃焼システムも世界初でした。

希薄燃焼システムの課題は、NO_x浄化でした。酸化雰囲気ではNO_xの還元浄化はできません。そこで私は、触媒に塩基性元素を担持して、NO_xを一旦吸蔵し、時々還元剤を供給して還元浄化する独創的で画期的なNO_x浄化法を開発しました。周囲や大学教授から「マジックの様だ」「信じられない」と称賛された時は、技術者として無上の喜びを感じました。

ほかにも、燃費を競っていた時代に世界一位を獲得したり、ウィーン王宮など海外四ヶ国で講演したり、とても充実したエンジニア生活でした。

私は触媒の性能を最大限に引き出して、地球環境の保護に貢献しましたが、長岡高専で学んだ化学の知識とセンスが大いに役立ちました。

勿論、これらは周囲の理解と協力があったお陰で、いつも「感謝」の気持ちを忘れていません。私は、優秀な技術者である前に、立派な社会人・家庭人でありたいと思っています。

また、私の経験からいえば、追いつめられ苦しんだ末に、本当に良いアイディアが産まれます。皆様も逆境の中で頑張れる、強い人になってほしいと願っています。

同窓生

加藤 健治さん

高専化学第4回（昭和45年3月）卒業。新潟県長岡市に生まれ、浅井長政の子孫。卒業後はトヨタ自動車に入社して、自動車の排気浄化と燃費改善の先行開発に従事し退職。日本機械学会賞、自動車技術会賞など受賞。趣味はゴルフと海外旅行です。

Alumnus 3

技術をキーに知識を実践に

―やはりエンジニアはおもしろい

私が経営者になるなんて、自分も含めてだれが予想しただろうか。長岡のはずれで農家の長男として生まれたが、中学までは農業の手伝いが日課であり、大志などまるでない状態で過ごしていました。親に言わせるとそれなりに「ガンコ」なところがあったようです。

今振り返ってみると、大きな変化の一つ目は高専入学から始まったと言えます。それまで農業機械やラジオなどに興味は持っていましたが、趣味の領域でしかありませんでした。在学中は与えられた授業を、ただまじめに聞いているばかりで及第すれすれでしたが、機械関係や実験や卒研は大いに気合いが入っていました。それは技術の成り立ちが基礎から理解でき、その応用や創造性が広がったと感じたことにありました。高専で受けた教育は私の可能性を大きく広げたと言えます。

大きな変化の二つ目は㈱アイチコーポレーションに就職したことです。成長盛りの中小企業で何でもやらされた事が幅を広くすることにつながりました。技術知識において高専で習ったことは大卒よりも上に感じ、かなり評価も高かったと記憶しています。チャンスや新しい経験が多く、いつの間にか理論と実践が整合された時間を過ごしていました。新たに大きく学んだのは、マネジメント（技術・人間関係）の入り口を経験させてもらったことで、仕事をやり遂げるのは一人ではない事を知らしめてもらったことでした。

長岡に帰ってきた時は不況で、機械設計事務所などを転々としましたが、結局一人で設計業を始めることになりました。そして昭和五十八年マコー㈱設立に到りました。大きな第三の変化でした。最初は私ともう一人のたった二人の小さな経営ですが、資金繰り、営業、経理などやる仕事は格段に多くなりました。しかし、あまり大きな不安はありませんでした。ずっと機械及び機械設計に携わってきたという自負が私の中に一本の柱としてあったからです。

長岡高専を卒業後に経験した設計はクレーン・プレス・圧延機・金型・ウエットブラスト等々、技術で言えば材料・材力・油圧・空圧・流体・電気・制御等々、多岐にわたりました。さらに人との出会いやプロジェクト参加のチャンスや失敗挽回のチャンスが加わり経験の幅が広がりました。技術の事を長くやっていると、シーズやニーズの情報やチャンスが多く集まってきます。成功すると評価も得られるようになり、ますます技術オリエンテッドの仕事はおもしろくなりました。

今、私はマコー㈱の経営の前線から一歩引き、新しいことにチャレンジしております。一つは博士への挑戦で、昨年工学博士を取得しました。もう一つは新しい技術を社会に提供、認知してもらうために新しい会社㈱パルメソを設立したことです。私自身も原点に返って機械の設計を行っております。原点であるエンジニアに戻って、おもしろおかしく楽しんでおります。技術者として社会に役立つことを自分の手で生みだせる喜びは大きいと感じているこの頃です。

同窓生
松原　亨さん

高専機械第6回（昭和47年3月）卒業。新潟県長岡市生まれ。卒業後㈱アイチコーポレーション（埼玉県）に就職。長岡にUターン後、昭和58年マコー㈱設立。平成22年㈱パルメソ設立。技術をキーワードに経営マネジメントを日々の課題として取組んでいます。

長岡高専への熱きメッセージ

Alumnus —4

思いは叶う—愚公山を移す

記念誌寄稿のため、久しぶりに約四十年前の古いアルバムを引っ張り出して見ると、日本中を駆けめぐったヒッチハイク旅行（九州、北海道一周等）と卒業研究関連の写真しかないのです。老化中の灰色の脳細胞を活性化して思いを巡らすと、一致団結して果敢に上級生に挑戦したクラス対抗球技大会、タイガー計算機を回しての橋梁設計、互いに励まし合った夜間歩行などが懐かしい思い出として蘇ってきます。

卒論テーマは膨張コンクリートに関するものでした。仲間とともにコンクリート練、キャッピング等による供試体づくりや、夜を徹して行ったデータ観測作業、締め切りぎりぎりでようやくまとめあげ、内容の出来についてはいささか疑問もありましたが、当日の発表会に間に合わせることができました。もちろん当時の卒論指導教官の国府先生、この年赴任された若き佐藤先生（兄貴のような存在）からの適切なアドバイスの賜と受け止めております。

新潟県土木部に入庁後、JICA（旧国際協力事業団）の要請を受けて、異文化の世界（インドネシア国）に赴任し、土砂災害対策の技術指導をする機会を与えられました。英語、インドネシア語に苦労、戸惑いながらも「あせらず、あきらめず、あなどらず」を肝に銘じ、なんとか使命を果たすことが出来ました。技術移転のみならず多くの人的ネットワークを構築できたことも大きな成果であったと思っています。

また、未曾有の被害を与えた「中越大震災」からの復旧においては、全国から技術者の応援をいただき「住民の早期帰村や安全・安心の確保を図らなければならない」と技術屋魂と熱き思いを共有し、寝食を忘れて復旧に努め、僅か三年で復旧完了をなし遂げることができました。職員と達成感を味わい、土木の力、人間の力強さに感動したものです。

今、振り返れば、高専時代の日本見聞旅行や苦楽を共にした仲間達との多くの経験は、その後の技術公務員の道を歩む私にとって精神的基盤になっていたのです。また、入学時の担任でありました木島熊一先生から同級会の名称を「移山会」として名付けていただきました。「愚公山を移すの故事より、怠らず努力すれば、必ず達成できる」とのエールを込めてです。

創立五十周年を迎え、学生諸君には社会が刻々と変化する中で、その変化に順応出来る柔軟さと進取の気持ち、そして揺るぎない信念をもってそれぞれの課題に取り組んでいただきたいと祈念します。経験に無駄は無い、思いは叶うのであります。

最後に、平成十九年に不慮の事故にあった佐藤國雄先生の冥福をお祈りしたいと思います。

同窓生
平野 幸生さん

高専土木第1回（昭和48年3月）卒業。新潟県上越市出身。同年4月、新潟県土木部入庁。2年間、JICAの地すべり対策の専門家として、インドネシア国に赴任。平成16年発生の「7.13水害」「中越大震災」からの復旧事業を指揮。平成22年、土木部技監として社会資本整備・維持を推進中。

Alumnus 5

二十年後の自分に残る感覚と後悔、そして希望

同窓生

山本 大策さん

高専電気26回（平成4年3月）卒業。新潟県柏崎市生まれ。卒業後、米国・コロラド大学（学士）に進学。その後、カナダ・サイモンフレーザー大学（修士）、米国・ミネソタ大学（博士）、ミシガン州セントラルミシガン大学の助教授を経て、2009年よりニューヨーク州コルゲート大学の助教授（地理学・アジア研究）。専門は経済地理学・地域開発・地理情報システム。

小さな頃から何か作ることは好きでしたが、中学校卒業の時点で特に技術者を目指していた訳でなく自分に挑戦するつもりで高専を受けました。しかし張り切って高専の門を叩いたものの、「不純」な動機で入学したせいか、入学後は「何かが違う」と悩む毎日でした。所属していた軟式テニス部の練習には情熱を傾け、また春休みにはスキーで山ごもりをするなど課外活動は充実したものでした。しかし肝心の学業にどうしてもやりがいが見いだせず、中間・期末試験でがんばって単位を取っても、所詮付け焼き刃、新しい知識を身につけたという達成感を感じることができませんでした。

そんな状況を打破したいという思いや、高専の英語の水準は低いという周囲の評価に対する反発心から、通学電車の中ではNHKのラジオ英会話を聞き、また長岡市内の英会話学校に通っていました。二年生の時だったと思いますが、何かを変えたいとの思いがあったのでしょう、担任の米岡清四郎先生に夏休みの間海外でホームステイでもしてみたいという相談をしました。すると「それよりも、高専を卒業してから正規学生として留学を考えてはどうか」とのアドバイスを頂きました。この先生の言葉が初めて留学を意識した瞬間だったと思います。

そして自分のその後の人生に、さらに大きな影響を及ぼしたのは、関東信越地区高専英語弁論大会への参加でした。きっかけは二年生の時、学食で友達と食事をしていると、樋口正昭先生がこちらのテーブルにやってきて「誰か英語弁論大会に出てみないか」とテーブルを見回しました。その時、「あ、僕やってみてもいいですよ」と言ったのがきっかけで、その後三年連続で大会に参加することになりました。

この時の先生の徹底した個人指導が、今の自分の英語力の基礎を築いたことに疑いはありません。一年目はそれなりに納得のいくスピーチができたのですが、翌年は少し生意気になったのか、途中でつかえてしまい失敗。三年目はそれまで以上に練習を繰り返し、幸いその年は優勝することができました。いまでも覚えているのはその優勝の嬉しさよりも本番のときに感じた、どの練習の時よりもリラックスして、練習以上の力が出せたという不思議な感覚です。真剣に努力した結果として得られるその体験がその後の人生において、何事をするにも追い求める感覚となっています。

弁論大会の経験だけでなく、情熱を傾けたクラブ活動や、恩師との出会い、生涯付き合うことのできる素晴らしい友人達は、どれも学生時代に得た宝です。ただ、振り返ってみて、本業の勉学で同様な充実感を得ることができなかったのは本当に悔やまれます。卒業して間もなく二十年、高専は大きく変わったでしょう。もし、学生と教官の方々が皆、「ここでは、毎日なにかよりも素晴らしい学問と教育が行われている」と自負する状況があるのならば、卒業生としてこれ以上の喜びはありません。長岡高専の益々のご発展を期待しております。

Alumnus 6

高専卒だからよろしく！

「高専卒だからよろしく！」という会話で始まる仲間、先輩、後輩がいます。私が日々この話題で感じることは、高専チームも結構優秀だな、ということです。是非ともこの文言が普及できるように皆さんも自信をもって普及させましょう！　同郷・同系列の仲間が増えることはとても誇りですし、私自身も誇りに想っています。このレターをみてそのように思っている方も多いのでは?!

と、結論から入りましたが、長岡高専五十周年記念を祝しまして、私からで恐縮ですが、母校の先生方ならびに高専卒の皆様にも本誌を通じてメッセージを贈らせて頂きます。

私の体験した高専とは、日本国立で工業分野を担う専門家をつくるための専門学校です。そのための徹底した学力向上の教育があり、成功には、指導していただける先生とその環境、それと本人の意思がそろうことが必要だと思っています。特に勉強が嫌いだった私には、学校に行くことや勉強をするための興味やメリットが必要でしたが、いくつかのご指導と環境をご用意いただけたと思っています。

そして、専門性が高い高専での教育が社会に役に立つための指導方針は、一通りすべてこなす教育を受け、現在ものすごく役に立っています。

私の専門分野はITで、授業で行ったことは全く使っていませんが、お話しには出ます。そして、学校で身に付けた教育知識は、調べれば何のことか最低限理解ができる、それで十分かつ上等です。今の私に〝手に職〟があるのは、高専の枠組みで工業系＝IT必須がきっかけでした。たくましい人生＝自分の腕で生き残れる＝手に職がある、という構造は幸せです。もっと情報共有をして、先輩と先生と生徒が高専を中心にメリットの情報共有をしていただければ幸いと思っております。

それにつながる話として、きっかけになればと思い、以前母校で特別授業でのIT分野でのベンチャー企業経営とマーケットの講師をさせていただきました。現在、工業系ビジネスでは質の高い開発者・技術者と低賃金のライン労働者とで世界規模で競争が激化しています。国内空洞化で、激化する単純作業は国外へ技術移転される中、生き残るため、お金を稼ぐため、勝ち組になるため、ここまでの基礎技術・ベースが必要です、というようなことをお話しさせていただきました。きっかけさえつかめる環境があれば、高専が排出する人材はまだまだ市場に通用できるチャンスがあると思っています。その手に職をもったエンジニアが、多言語対応、対話能力、IT活用の三種の神器ならぬ技能を培い、卒業生先輩の一員として企業存続十六年目となりました。

どこまで、皆さんに理解していただいたかわかりませんが、このような講座と最低限のお手本のきっかけづくりを行っている学校での企画担当者様含め、今後の将来を担う後輩たちへメッセージを直接伝えられたことも、とても感謝しています。

最後に、ここまで育ててくれた先生・母校の皆様に感謝しています。本誌を通じて高専関連の皆様のご健勝をお祈りいたします。五十周年おめでとうございます。

同窓生
高橋 一男さん

高専制御第1回（平成7年3月）卒業。新潟県南魚沼郡湯沢町生まれ。卒業後は私立関西大学総合情報学部に進学。大学在籍中にディーネットを創業し、平成11年に株式会社ディーネットを設立。座右の銘は、人として力を持て！生きる力を持て！　です。

Alumnus 7

在校生、卒業生のみなさん、お元気ですか？ 私は元気です！

同窓生

三膳 陽子さん

高専化学第29回（平成7年3月）卒業。新潟県新潟市生まれ。卒業後シプレイ・ファーイースト株式会社（現ダウ・エレクトロニックマテリアル）に入社。現在も製造・技術に所属し、新製品の立ち上げ、製品設計業務に従事しています。

この度は、長岡工業高等専門学校創立五十周年を迎えるにあたり、一卒業生としてお祝い申し上げます。

私が長岡高専を卒業してから早十六年の年月が過ぎました。学校に在籍中、卒業後の思い出を思い出すのも中々に困難になってきましたが、絞り出して書いてみたいと思います。

私が入学したのは平成二年でした。卒業してからも友人や会社の同僚などに良く、「十五歳位でよく家を出る気になったね。」と言われました。今思えば中々に大胆な選択であったと思いますし、両親も良く了解してくれたものだと思います。

その頃進路に悩んでいた私に、父親がちらりと高専という学校の存在を話してくれたのがきっかけでした。単純な私はそれだけで高専生になる妄想にとりつかれ、勢いだけで受験し、合格してしまうのですから、人生何だか分からないものです。

入学してからは本当に毎日毎日バタバタとしていたのを思い出します。皆さんご存じの通り、高専は大学のようなカリキュラムをこなしていかなくてはなりません。中学までは、部活ばかりで、あまり勉強もしていなかった私が、全く新しい環境の下、毎週のレポートの提出と、下宿生活で慣れない身の回りの事も全て自分でやっていたので毎日がてんてこ舞いでした。でも高専坂を上って学校はちゃんと通っていましたね。

それから私が三年生になったその年の春、女子寮「清花寮」が開寮し、「初代女子寮長」を任される事になりました。

多感な時期の女の子の寮をまとめるのは中々に大変な事でした。それまでの実績があれば、それに習う事も出来たのでしょうが、全く「0」からのスタートだったからです。高志寮の寮長、副寮長に助けて貰いながら、男子寮の年間行事にも参加させて貰ったりして、毎日泣き笑いしながら寮の運営を行っていたと思います。今にして思えば、清花寮の長い歴史の初年度だったわけですから、もっと丁寧なルール作りや、それからの見本となるような寮運営を心掛ければ良かったかなと反省しています。でも、きっと現在の清花寮の寮長さんや寮友会のメンバーが素晴らしい寮の伝統を築き上げてくれていると信じています。

勉強、寮生活、卒研、部活いろいろあった高専の五年間はあっという間に過ぎてしまい、卒業と同時に新潟に帰郷し、就職をする事になりました。

卒業して就職した外資系の化学薬品メーカーに十六年間勤務しています。私の会社にも長岡高専のOB、OGが七人在籍しています。写真のみなさんがそうです。一人は残念ながら仕事の都合で登場出来なかったのですが、みんな元気にやっています。私は製造・技術の業務を担当しています。製品設計などが主な仕事です。他の高専O

B、OGは私と同様に製造・技術系か又は研究・開発を担当し、それぞれの担当で活躍されています。

先に書きましたが、私の会社は外資系なので英語がとても大事なコミュニケーション手段となります。学校でも先生に「英語は将来役に立つので勉強しておくように！」と口をすっぱくして言われたにも関わらず、未だに英語は本当に苦手で、苦労する事が多々あります。

一昨年前に、一カ月間海外に出張していた時期がありました。英語やその地域の言葉を話さないとご飯が食べられないとか、移動が出来ないというピンチの連続でした。何とかコミュニケーションを取る事に成功し、ピンチを切り抜けましたが、でも学生のみなさん、私の様にいざという時に困らないように日ごろから生活と密着した語学の勉強はしておいた方が良いですよ。

さて最後になりますが運命の出会い？行きあたりばったり？　で高専に入学し、無事に卒業して今現在に至るわけですが、高専での経験はこれまでの私の人生に多大なる影響を与えているのは間違いありません。寮で鍛えられた我慢強さは会社での業務にとてもいい影響を与えていますし、もちろん勉強してきた事も活かす事が出来ています。そして、高専での友人や先輩後輩、先生とも今でも交流があるのは本当にうれしい事です。みんな楽しく元気にやっています。

私の高専の恩師小林武郎先生は、私が卒業して数年後突然亡くなられました。厳しい中にも優しさのある尊敬できる先生でした。私の手元に先生直筆の葉書が今でも二枚だけ残っていて、一枚が年賀状、もう一枚が先生の退官をお祝いする為にクラスで計画した「退官祝賀会」の出席を知らせる往復はがきの片割れです。退官祝賀会での久しぶりに教え子に再会した時の先生の嬉しそうな顔を懐かしく思い出しました。

最後に、懐かしい高専時代を振り返る機会を与えて下さった、諸先生方、実行委員の方ありがとうございました。

Alumnus 8

ロボコンで培ったハングリー精神の源泉を振り返って

秋の匂いはロボコンの匂い。街中で流れる懐かしいメロディーを聴いて、それを聴いていた時代の思い出が蘇ってくるように、私にとって秋の匂いはロボコンに打ち込んでいた高専時代の思い出を鮮明に蘇らせてくれます。

私が高専に入学した平成九年。長岡高専では初めて、NHKの「アイデア対決・ロボットコンテスト」（通称ロボコン）に参加するためのクラブ、ロボティクス愛好会が設立されました。一年生だった私は、学生ホールに展示されていた先輩方のロボットを見て、その格好良さにときめき、わくわくする気持ちを抑えきれずにクラブの門をたたきました。入部の翌日から先輩方が機械工作の基礎をご指導してくださいました。旋盤で真鍮の棒材を削ったり、ボール盤で穴をあけたり―中学を出たての私には、一つ一つ新しい技術を覚え、腕を上げていく感覚がとてもうれしくて、誇らしくて、毎日遅くまで夢中でやっていました。楽しく、充実した毎日でした。

そんな私のロボコンデビューは大きな挫折から始まりました。その年、一年生ながら私のアイデアが採用され、恐れ多くもチームリーダーとしてロボット製作に取り組むことになりました。しかし、実際にやってみるとロボット作りは思っていたよりもはるかに難しく、一年生の私達だけではなにもできないことを思い知らされました。先生や先輩方の力をお借りしながらようやく形になったロボットは、地区大会本番で動かず、操縦者の私はテレビカメラの前でただ呆然と立ち尽くすだけで終わってしまいました。長岡高専の名前を背負ってテレビに出ることの意味や、半年間死に物狂いだった製作の「過程」ではなく「結果」だけが評価される社会を知り、現実に叩きのめされるような深い挫折感を味わいました。大会終了後、メンバーの皆や先生方と言葉少なに帰った帰り道の静けさ、そして涼しい秋の空気の匂いは、このときに感じた悔しい思いとともに深く自分の心に刻みつけられました。

私達の本当の挑戦はその翌日から始まりました。頼りだった先輩方が抜け、自分たち一年生だけになったロボコンオフシーズンの冬。春までに自分たちに足りない技術と経験を補うべく、皆で分担して様々な技術を習得しました。そして迎えた二年目の大会。私達は、一年目とは比べ物にならないほどの成長を遂げていました。圧倒的な強さで地区大会を制覇し、全国大会に出場、そして全国大会準優勝の栄冠に輝いたのです。あの時の達成感と、充実した皆の笑顔は一年目の挫折あってこそのものだったと思います。

その後私達は、平成十二年のロボコン大賞をはじめ数々の賞を受賞し、皆で長岡高専のロボコン黄金時代を築きあげました。全てはあの一年目の秋に感じた悔しさをばねに、がむしゃらに夢を追いかけようとする思いが生み出したものだと思います。あの頃の思いを「ハングリー精神」と呼べるならば、今もその思いは消えていないだろうか？　毎年十月、あの頃と同じ秋の匂いを感じるたびに、そんな自問自答をしながら、一途に頑張っていたあの頃の気持ちを思い起こし、次の一歩を踏み出すための原動力にしています。

同窓生
佐藤　塁さん

高専制御第8回（平成14年3月）卒業。新潟県柏崎市生まれ。卒業後は東京大学に進学し、分子生物学を専攻。平成22年に同大理学系研究科にて博士号（理学）を取得しアステラス製薬㈱に就職。病気の根絶を目指し新薬の研究開発に取り組む毎日。

Alumnus — 9

本当の日本と出会えた高専生活

少し雪が残り、肌寒かった十一年前の春、新幹線の改札口で担任の先生に迎えられ、初めて長岡に着いたときのことは今でも鮮明に覚えています。ここからが私の〝本当の〟日本の生活が始まりました。長岡高専に来る前までは、一年間東京で日本語を学びましたが、留学生同士での生活でしたので、本当の日本の生活に触れる機会が少なかったのです。

長岡高専では学生寮に入り、生活のルールは当然ですが、食事や日本人の友達との付き合いなど、日々新発見の連続で新鮮でした。

勉強の方はやはり最初大変でした。慣れない授業のスピード、新しい専門用語などで毎日辞書を片手にしながら勉強していました。しかし、いつも丁寧に指導してくださった先生方のおかげで、自分の（授業への）理解を深めただけではなく、その面白さも理解できるようになりました。母国で勉強していたころは、学生に対する先生の割合が少なく、放課後の先生への質問、議論するチャンスはほとんどありませんでしたので、なんでも相談できる先生方の存在は大変ありがたいものでした。

その当時は、留学生が二十人ほどで、マレーシア、ベトナムなど東南アジアの学生が多くいました。勉学以外にも、羽織袴・着物の試着、お正月の餅つき、盆踊りの練習など私たちが日本の文化を体験する貴重な機会を多く頂いて、大変感謝しています。

その他に、私の印象に残ったのはやはり他の日本人学生と盛り上げた高志祭でした。三年に一回開催される盛大なイベントだけあって、みんなは準備が始まる前からわくわくしました。留学生ももちろん参加し、自国の自慢料理の屋台を出したり、演劇などにも参加したりしました。この高志祭では、学生のみならず、その家族や周辺住民も見に来てくれたので、交流するチャンスでもありました。何より嬉しかったのは、これを通して他の日本人学生とより溶け込めるようになったことです。留学生の場合は、五年制の高専に三年目から編入しますが、入ったばかりのころは言葉の壁や勉強へのキャッチアップなどもあってか、中々十分に交流できず、少々〝疎外感〟がありました。しかし、このようなイベントでの共同作業を通して、自分のクラスだけではなく、他の学科の学生とも仲が良くなれたような気がします。

豊かな自然で、春夏秋冬を思う存分楽しめるだけではなく、〝本当の〟日本を体験できた私の長岡生活は今でも宝物です。かけがえのない留学生・日本人の友達や情熱に溢れる先生方に出会えたおかげで、今の自分があると思っております。

年々長岡高専へ編入する留学生が増加し、交流もより活発になっていることを聞いて嬉しく思っています。これからはアジアの時代だと叫ばれる中、長岡高専の貢献も益々重要になるでしょう。今後も、技術を学ぶ所や、人生の修行できる場所として、日本の学生だけではなく、世界中の学生を魅了し続けてほしいと願っています。

同窓生
スタルトさん

高専物質第4回（平成14年3月）卒業。インドネシア出身。卒業後、東北大学に進学。同大学大学院を卒業後、日揮株式会社に入社。現在、世界中のプラントの設計に従事しながら、少しでも母国と日本の架け橋になれるように努力しています。

Alumnus 10

現環境都市の「その後」を見る

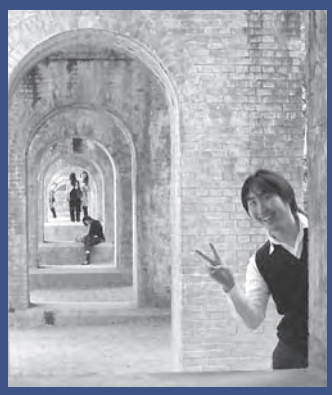
在学当時を振り返ると、その頃は現在の長岡高専ならびに環境都市工学科の姿が整ってきた確立期だったように思います。土木工学科から環境都市工学科に改組（一年生の頃の五年生は土木）、専攻科の創設（自身も専攻科進学）、独立行政法人化、ＪＡＢＥＥ認定（在学中は認定審査中）、中越地震による校舎損壊と復旧（旧三号館消滅）などがありました。

右に述べたように、当時は現長岡高専環境都市工学科（以下、環境都市）の原形が大方整ってきた時期であり、「この世代」の「その後」は環境都市の現在の姿を投影する一つの典型写像であると考えます。そこで「この世代」の一部である私の同級生の卒業後の進路状況を紹介し、現環境都市について一考したいと思います。これを紹介することは、諸先輩方・先生方には代表的な現況のご報告に、在学生の皆さんにとっては今後の進路の参考になるのではと考えました。紹介するデータは、環境都市第四回生（入学時又は卒業時に第四回生、全三十七名）の卒業後の進路について直接的・間接的に聞き取った情報を集計したものです。

一つ目は「最終学歴」です。その内訳は、高専（準学士）が十四名（三七・八％）、大学・専攻科（学士）が九名（二四・三％）、大学院（修士・博士）が十四名（三七・八％）となっています。構成比はおよそ「三：二：三」となっており、高専卒と大学院卒が比較的多いというのが現状です。昨今では、専門技術の高度化や経済不況による求人枠の減少により、理工系学生の大学院進学は以前よりも一般化しています。このような中でも、高専卒は大学院卒と同程度の割合を占めています。高専は他の高等教育機関に比べて高い内定率を現在も維持していると聞きます。これは、高専における教育が現代社会にも受け入れられていることを表しているのだと思います。自身が、卒業後に即戦力となるか、さらに高度な専門性を身に付けるか、という幅広い選択を行える教育機関であるということは、複雑化した社会に柔軟に適応できる優れた高専の特性ではないでしょうか。

二つ目は「就業分野」です。土木系は二十三名（六二・二％）、環境系は四名（一一・一％）、建築系は五名（一三・九％）、その他は五名（一三・九％）となっています（結婚で離職等した者は婚前の勤務先）。土木・環境・建築を合わせると約九割であり、環境都市は、就学者の大半を都市や環境に携わる人材として実社会に確実に排出できていることが分かります。また、土木から環境都市への改組が影響しているためか、土木系のみならず、建築・環境・その他にも就業の範囲が及んでおり、就業分野の多様化も見られます。

以上は長岡高専環境都市の歴史の一断面を稚拙に評価したものに過ぎませんが、現本科の存在意義の一部を垣間見ることができるものと思います。昨今は理科離れ・普通科志向による志願率低下という大きな危機に見舞われていますが、これを乗り越え、次の五十年間も社会にとって必要な長岡高専環境都市工学科であり続けてほしいと願っています。



同窓生

佐藤 翔輔さん

高専環境第4回（平成15年3月）卒業、専攻科環境第4回（平成17年3月）修了。新潟市生まれ。在学中はバレー部・学生会・寮友会・学園祭の活動に注力。修了後は、京都大学大学院情報学研究科に進学（京都大学防災研究所巨大災害研究センター配属）。博士院生時に日本学術振興会特別研究員に採用、結婚、第一子誕生。大学院修了後、東北大学大学院工学研究科災害制御研究センター助教に着任。親族中4人（伯父・従弟・妻・自分）が長岡高専卒業生。

長岡高専への熱きメッセージ

Alumnus 11

現寮生たちへ

―中越地震から六年後に思う

長岡高専を卒業して、あっという間の六年。十五歳で高志寮に入寮したのが十年以上前だと考えると、歳を取る事の早さには恐怖すら覚えます。寮生時代の思い出はつきませんが、文字通り衝撃的だったのは、六年前の中越地震での三日間でしょう。

平成十六年十月二十三日、外出先で地震に遭遇した私は直ぐに高専へ向かいました。信号機が機能していない中、徒歩で一時間以上歩いて到着した母校は、いつもとはまるで景色が違っていました。傾いた校舎や、ひびの入った通学路を過ぎた後に着いた食堂脇の広場では、少数の通学生と、帰省しなかった寮生が集合していました。それぞれに不安そうな表情をしながらも、とりあえずこの場にいる皆が無事な事を喜んでいたようでした。

その後は皆で体育館に移動し、寮友会役員達と先生方の指導の下で、家族への安否確認やライフラインの確認と確保、帰宅へのサポート等の対応に追われました。その結果、数日後には皆無事に帰宅させる事が出来ました。しかし、被災した校舎と寮の状態は酷く、当時の我々五年生は卒業まで高志寮に戻る事はできませんでした。仮住まいの和光寮にて冬を過ごし、春休みも殆ど無いまま卒業式、そして三日後に入社式という何とも慌しい状況でしたが、自分達なりに寮生最後の年を有意義に過ごせたのではないかと思います。

今になって当時を振り返ると、あの状況下で誰一人としてパニックを起さずに協力し合えたのは、寮生の協力があったからだと思えるのです。日頃の寮生活で、お互いが適度な挨拶を交わせるような関係であった事が、被災して不安な状況での不思議な連帯感に繋がった筈です。

私は寮長だった頃、寮とは、お互いを気遣える関係と気持ちを育てる為の場所であるべきだと思っていました。当時は大声を出させる伝統的な指導方針と、その影響で寮を辞めざるを得ない学生が居る問題に頭を悩ませ、結果的にはそれらを廃止する事になった、高志寮の歴史的には大きな転換期であったと思います。しかし、それは必然だったのでしょう。ただ、その頃から寮生同士の交流や行事への参加が少なくなっていったのも事実でした。

私は皆さんに、寮という場を有意義に利用して、同級生だけでなく、先輩や後輩達とも良い関係を育んで欲しいのです。社会人になる前の貴重な時間を無駄にせず、より多くの人と交流し、生涯の仲間を多く作って欲しいのです。

私は毎年、年末になると当時の寮友会メンバー達で同窓会と称して鍋を囲みます。そして、皆で寮生だった頃を懐かしみながら酒を酌み交わすのです。皆さんが高志寮で一生の思い出が作れる事を祈っています。

（平成二十二年十二月三十一日）

同窓生

内藤 一真さん

高専機械第39回（平成17年3月）卒業。新潟県上越市（旧名立町）生まれ。卒業後は、長岡市の㈱大原鉄工所に就職。生産管理という役割の中で、現場の意見を重視した物作りに励んでいます。座右の銘は「質実剛健」。

Alumnus 12

あれこれ言っても僕たちは高専生

――やあやあ我こそは

学生会長

川上 雄太さん

平成19年4月入学。電気電子システム工学科。平成23年学生会長。創立50周年の節目の年に、偶然学生会長に就任、驚愕する。座右の銘は「為せば為る」だが、為すことの方が少ない。「果報は寝て待て」の方が良いかもしれない。

私には荷が重い仕事です。何が難しいかといえば、私は現時点で四年生。卒業生でもない私が、高専への思いを語らねばならないのです。過去形を使うべきなのか、現在形を使うべきなのかが非常に悩みどころなので、時系列順でご紹介しましょう。

まずスタート地点は、中学生時代です。中学生だった私には、確固たる決意も、大した理想もなく、ただなんとなくで長岡高専を受験し、入学してしまった感があります。なぜだったのか、もう覚えていません。この時の私は、長岡高専に対して特に思い入れはありませんでした。

次に、一年生から三年生。入学当初の私のまま、何の決意も、大した理想もなく過ごした三年間でした。はっきり言って、中学三年生のままで三年間過ごした、と言っても過言ではないでしょう。今思えば、それくらいに私は成長しない人間でした。

そして四年生の一年間。つまりここ一年間の話ですが、この期間は凄まじい濃度で、私の今までの人生で一番充実した生活を送ってきました。その前の三年間をすべて合わせても、ここ一年間の質量には遠く及ばないと断言できます。きっかけは、研究室への配属でしょうか。今までにない高揚感を覚えた瞬間でした。ここでは、やろうと思えば何でもできる。そうか、私はこのために長岡高専に来たのだ、と四年生の半ばで気づいた私。ここにきてようやく、高専への思い入れが芽生え始めます。そして、五年生も目前の現在に至る。

以上、私の四年間の回想でした。自分で書いておいてなんですが、なんという中身のない経歴なのでしょうか。なんという人間性の薄い、ティッシュペーパーのような味気ない経歴なのでしょうか。書いてみるまで気づかなかったのが、非常に恐ろしいです。私は、自分で思っている以上につまらない人間だったようです。

幸い私には、あと一年間だけ、在学する期間が残されています。せっかく芽生えた高専への思いを枯らさずに、残り一年間で汚名返上しなければなりません。研究室に入った時の感覚さえあれば、中身のある経歴を作れるはず。新聞紙くらいには格上げできるでしょう。あわよくば文庫本くらいにできるかもしれません。一年後には、「最高の学校生活だった」と言えるように、中身のある人間を目指していきます。

私と同じような状況にある方が、高専にはまだ居られるように思います。そしてこれから入学してくる方々の中にも。私のように、こんなに遅くまで高専というものを理解できないようでは、手遅れのようなものです。できるだけ早く、長岡高専に来たことの意味に、気づいてほしいです。私のように、職業を尋ねられた時に、「高校生です」と答えているようでは甘いのです。高らかに名乗りましょう。「高専生」を。

（平成二十三年三月）